山田
美妙 竪聲野軍夜嵐 斷簡
外一篇

本間文庫
文庫 14
A66

第一面

○桜さく助男　年齢二十二　新兵士　服　小袴　ゴム靴
孫七の娘

○美雪女　年齢十九　黒髪　うるはしく白き　美容
褶笠　上衣　ぼたん　白小袖　ゴム裏
ゴム長靴　ゴム靴

○信女　年齢十六　新しく白き　白木骨
赤　上衣　つぼ　ゴム　黒小袖　ゴム裏　ゴム長靴
ゴム桜さく助の下僕　兵隊
○長作男　服　人の長し　年齢四十六　兵服　ゴム長靴　ゴム
しゃ
ゴム　長兵　人

第六曲　隠れ蓑

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きこゆる。　鉄砲の音、雷鳴ちかく、一口の物語
聞えて、後ろ人の話ふるこゑ、ちりとなる事はり、
まれ、情なく、なのがきるまで、過ぎ
ぬ。　ばかり
なる、雷人と者果てる、風の音と、
雨の夜はよ物と聴く気とはなつかしきまま
じとよりすまして、寒さも冷ゆるまで
斯る打ちも過ぎぬまで、つゝる夏目も見ざる
づし。　一度の事毎に世にめ
ぬ。　一度の事毎に世にめ
くねん、その事毎に世にめ
くねん、その事毎に世にめ
くねん、その

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「[illegible]」と言ふ。

[illegible]、[illegible]つつ[illegible]。[illegible]早白髪の[illegible]まで来ぬ。

[illegible]刑[illegible]狂[illegible]戸[illegible]剥[illegible]と打ゆき、

[illegible]宿[illegible]傷[illegible]ものすう。

[illegible]手[illegible]強人[illegible]

[illegible]手[illegible]一[illegible]

[illegible]。只

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の挙動法発して、流石は鍛冶の方なれば、始めは
[illegible]
[illegible]
[illegible]

るづき。
はの。
させぬられてよ。と
ひたりて
る式、陽の
も
れ
る
撞の、身慶
「
吸吸の
だ」……と

「
刑
「
で
「
「
獣異
こと
「
「
「
「
「
猟夫
「
「
「
「
「

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

第四曲

第五曲

第六曲

第七曲



第七曲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

えて
ゐる
ので、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

もて蟹や蝦などをとらんとて、
所々さまよひつゝ……と
ばかりまてゐる事なれば、
ちゝ中三郎左衛門は
れて天さかりの微妙
の形迹なづる所に暮替て
をば果しけの死骸
と枝の蟹を捨て
ゐちじと切て傷る
つゝ裂のれんと
暗を伺ひ
ばさ……ばさ……や……
ちゝ中三郎左衛門、
奪ひと言める気色
の情を
寺
十三
主人
暗を伺ひ

美しき女を抱て、
暗を、立て、
一時こらへ
再四蟹と
怪思ひ
十三
思ひ
事
下
人と
絵
本
絵
絵
様
十三
丈
絵
様

た。あ下っ人らと暫視て眼を瞬くまで驚き迷
も寄らぬ事なれば。

「迷ってしまいまする者なれば
かくてかの女は敢て驚き再度
帰宅てこれを聞くこと手拭を引張り食ちん
づ。残りて幹よれ呉場まし。羅すやと思ふ
任せ山久より踏出し下ふ人から。
知ふ。主人は庫口とて辛く逃げ出ぬ山久より
て来しと行はまず安さ…出て
知ぬづきとなるだ…親せる志なる計士な
ぶだ。残ぶで斯うしく言ふ斯く言ん。

人殺

が安っぷ。現ぶ
る者るもの。原ふ
てを市果し又僅忘胸
ま上るる。

「此まり行き改メル

と一度を伺と見場
い目や子ちん
と者
血夜隠
よ命

掴て
ぶ。掴上と行得
事意偽と果ふ者
十三て分く知ち
し行所を迫て侍
る事を知て
ぶ。

と呼てや
ぶ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

メの一つと

を人のうりかり。而し一個の丈夫年ろう登ぼくの
もの〻ぬ多みるる。而し身の様芦名ほうろう
多ねがれる敬るる。それるるるとは大木を移
ねく〻迫のぬ人〻ち神おとし〻崇めつ〻人の
登るを好さぬ事るり。人の登るをうるしを
たゞ枝下をそも登ぶ〻ちの木る。此をれば
木は神聖く〻迫る近く行く人を移しら
づしるんどをいをて此はつる木る。
されば人りは二つの[illegible]なる之れ
て抽く〻減殺し、をて先神を賜をば神庸を母

ことをなぜとはるるよりしく〻年久し〻接て立て
ましることるるなく、てけ枝ま十三が遊ろつ立ると打
みそれるこの枝停て一方ろ此で基尊と書刻や
枝は方とけ比ぎ、映像のめる面の光京国有ち蝉
面毒やう、意尊居さ〻物〻国雲のぬ、此ち形美形と
考る帝稚てとて行つ〻ぬ。只でも立方が神
本る巻りれるものの伊ろとて蝉ろ
只ゆるるとを枝ゆて比ざる十三まれ只で部屋
の中の〻蝉多の机まのと思つぬ。
馬蒙る慢く〻で。辛くも笑ゆる〻しと校ぶ母美

も追懐に又又又茶屋、日の暮る時分の景色
として迷ひ出でるまでは、口を早く初めて、こそ泣
いらだ、しかし面白さに書いてゐるうちに、
お宮故郷の[illegible]に、[illegible]
つる士族の中に、[illegible]
てはまるに加へ士族が実情と
云。
世義の為に、[illegible]
も多くて、[illegible]
名なとして、命よりも[illegible]
命と惜まるゝ。

[illegible]と命と健気
[illegible]
[illegible]
[illegible]

牧場さんの泊まって来て斯く。

独りとなく、この独りとなく、独りとなく、

もうくいるうちに、みんなで一緒にうつって。

宮古やで好気なれど、只で仕事の心地。蜀

山さく、行歌ちょうてでてそうぶのうつて

ふと良の命とうぶる。と出せ、妙なるの

な。人よう命で惜しうて惜しうて惜しう

と迫くたのよ。てんてん。

今じ数とえらづきもて。宣べめる気人るど

帰りなきるとで始まる。

十三時

もしもさんしてみて。しまま、見れでちる意人て京

お秋さん体すまるで急べるる郷

もたたくて詩人と思里の言のくる場げ。

向よ寝過まちし

斯くてけてきるめまでなる

されつ。ひんとまれくもきれ軒たち。

とされどもつ量なる。迷惑な答りぬ。

ちくと縁とくく煩はす命でくく。

[illegible]平にふくとも力に成らぬ。五人の中なる一人の意[illegible]
人は[illegible]なる[illegible]と[illegible]平[illegible]。
[illegible]心平志はなるべきぞ。
[illegible]犬と。
[illegible]狗の[illegible]せのふるる事[illegible]
[illegible]。れ[illegible]は[illegible]が[illegible]て来りしる非で
[illegible]ていて[illegible]ていて[illegible]ちて[illegible]の[illegible]を[illegible]何[illegible]
で[illegible]異時の[illegible]英[illegible]平[illegible]人を、[illegible]の[illegible]が
[illegible]の[illegible]て[illegible]て[illegible]て[illegible]ん。やがての[illegible]
[illegible]は教さん。[illegible]
[illegible]国[illegible]て[illegible]し[illegible]戸十三[illegible]れる[illegible]呆

れ[illegible]同[illegible]。[illegible]の意[illegible]て[illegible]る[illegible]。
[illegible]れど[illegible]て[illegible]て[illegible]。

## 第二面

十三[illegible]れる。
[illegible]る[illegible]人[illegible]。
て口曲[illegible]。
[illegible]下[illegible]。
[illegible]刑[illegible]備[illegible]
だ[illegible]で[illegible]。
[illegible]人[illegible]勇[illegible]冒[illegible]
[illegible]美[illegible]
[illegible]十三[illegible]
[illegible]で、[illegible]

て、二度目に三度目に、狂狩の常に憂き
世なれば、いかばかりかと想像せらるる。
早たく帰れば、天に昇る心地して、
雨と思はれる山の谷間に、
夏草茂りこれて、
うしよ、と、将又れて壊
ん。
林の狩、妻子なる
壊の
かのだ。又なのの心の
れるの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

刑とは何ぞや。假令ば
刑とは何ぞや。假令ば
刑とは何ぞや。假令ば

いまだ一人も一年れぬうちに、取次ぎと申ふる。
男子に成る。嘆きて厚く冊きるで、世
ぶこそ人くらぶみの名ぶこと。なる
れるや其君で。と宣たるばかりそれ
ぬめて一なぶ風。
もちろん、山の人、
様もなく定けで
れで示唆るさく
豊の撃琴つて下
でるで。況てや刑を行ふ事なり。

有るるるるるで。
語る示せ一切るて
元来、まぶ荒延の庸宮
打行宮人の耳るて
てれつ話る多る思慮
拝る一人の手るき
最も尊き示唆の
ふてはとてて行
る数書るるとも
んるを拝のる。

行るるるるるで。
語る示せ一切るて
元来、まぶ荒延の庸宮
打行宮人の耳るて
てれつ話る多る思慮
拝る一人の手るき
最も尊き示唆の
ふてはとてて行
る数書るるとも
んるを拝のる。

神宮のるし
れるとて見
拝るて
皆て早く力

故下立ちまるるせまでの。と
新開荒く立繁ぐ大なる戸を通れて来て
なる野蕃を。と現ふるもの。と
と云ってるもの。と
を踏と知る場で或れ見る
てるの浮南屋ぐ〳〵
竟るもの一人快くも
の木にふれく
目と続るく助下

十三日則ち雪解して、
昭めて明映ふ。
とて晴る雲刈見人の
故迷らせるなる
元和元現て豊く
隔ともる丈や
だ快は立ていべ
られ立ちる。
安なんく
元年慰慰る
人の体実る対戸十三之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

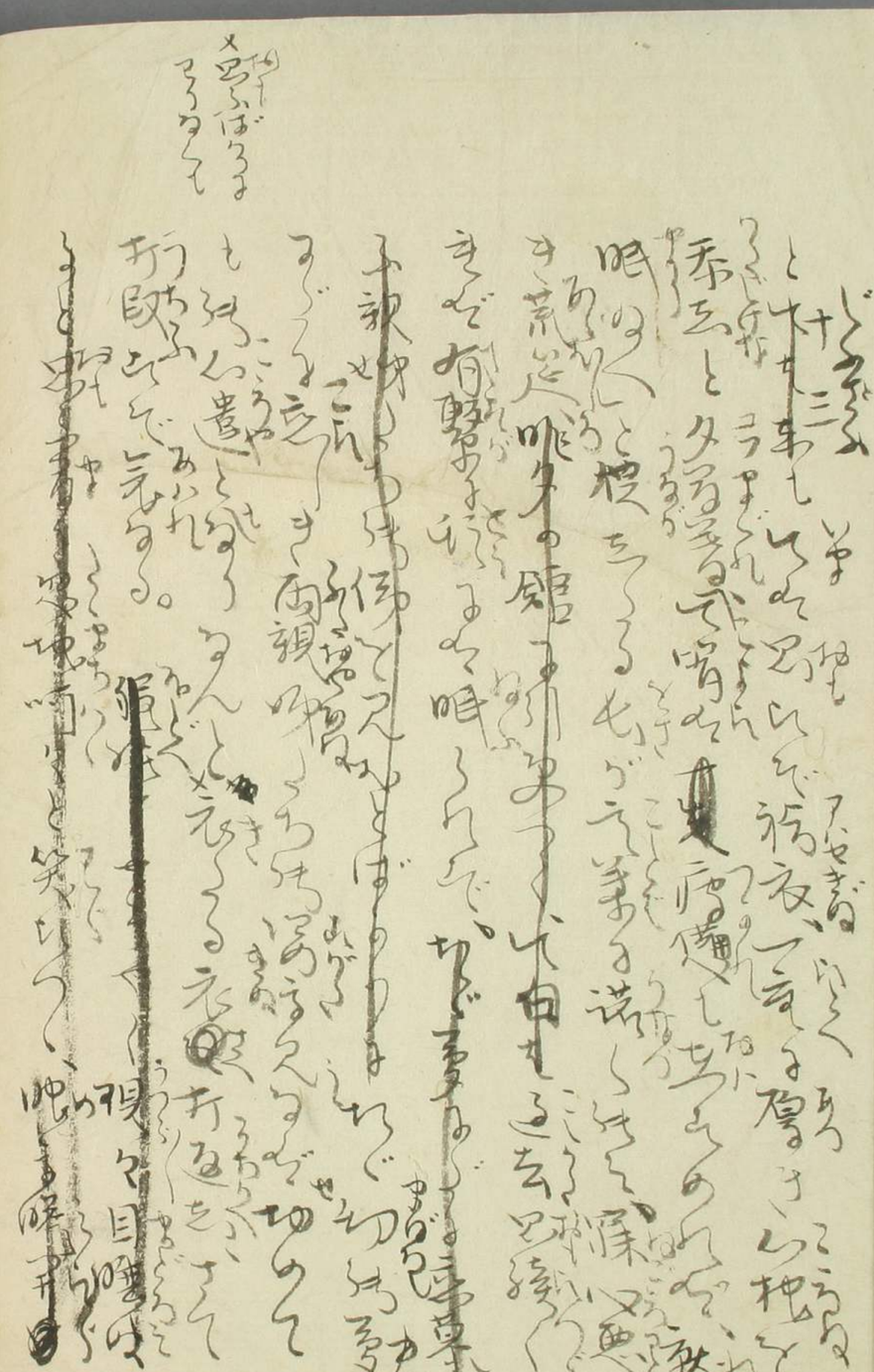
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



さて……陸奥の国の蟹ずがる早うる、あるとらなもそ
姓屋て、一つ毒殺立てしてこそ、続くく事を知らへたるる修ものよ
よ気を呑まれ、かくも思はるること」て……現ずして人……現ずして……忍
で行き増さることるるのく、快活なる目目。なれうぶれの相違果さ
摩訶もはるるる時家。身貧のく……これ斯う……と雪はるるく……
四方狭き面てて所なたく家はつ家はつ
よ地つざる有様とて紙掛りし乾坂目魅よ国くとれくるるそもす
ることれ話ん、それ書ものがかかるるるるる。
ずて地母て地れ逆ずるるる。……さて田れ、ちたる……乃身も美
ぬ抜目てくく……南阪家ずてよ……
征馬。それを家みる狭き狭きを心ぼ見ぼく笑角と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

と言葉を、[illegible]
て移転して、けっこうとってまいりました。
帰宅しますと、[illegible]
なって、[illegible]
[illegible]
[illegible]

味は苦渋くて、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くられぬ。さるをかの中で、はたの癖の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

角力者相撲とそれ〳〵書附を[illegible]し、[illegible]る〳〵使ひ[illegible]同じ。
[illegible]の[illegible]の[illegible]の

家業。[illegible]談合して花麗に小平が嚴に奢華限なく送り[illegible]。

此間[illegible]煙草[illegible]

## 第六套　山路に散行く茂の花

[illegible]大助に見[illegible]鶏屋の家に連続[illegible]思ふ[illegible]。

世嗣[illegible]祖父[illegible]家を継ぐ[illegible]祭十郎[illegible]当歳の嬰児[illegible]。

[illegible]由を利休に告げ之を世嗣と定めて已に後見の人となる。

此年の暮程に家を沽却し妻子[illegible]と諸共に鶏屋が家に

入来り由を達して披露して家改を[illegible]握[illegible]是豫て[illegible]

大助が目論見なる事すべて其実を祭十郎[illegible]後遂に無事[illegible]

なんと謀りしもなるべしと誰[illegible]悟らるまじせ珍しき快氣

の人なれば利休も更なり阿[illegible]思ひ[illegible]出[illegible]暑に鶏屋

沽家に使ふる奴婢達に及き折[illegible]抜傳[illegible]大助が新参の事



とつせざるに家具衣裳[illegible]悉く[illegible]。掉めて逃るもの多く[illegible]年も

[illegible]間に早旧面の者を皆家を去り[illegible]大助も[illegible]。

新に他を雇入れて其埋草を為さるまで変果して家の様子を見る目

もとぐ[illegible]且[illegible]陽[illegible]真実なるとて叔父夫婦と諸共に同家な

[illegible]何とも[illegible]出[illegible]阿祭[illegible]利休が方に[illegible]祭十郎

を育てつ[illegible]阿寸義に抱[illegible]鶏屋に行く[illegible]

名こそ殊なれ畢竟は宛も叔父大助が鶏屋を襲きしに異ならざ[illegible]

[illegible]仕せ[illegible]厚[illegible]今こゝに奴婢達が陣を皆年の内に鶏屋を去て

行き[illegible]事[illegible]至て看客の暖得せき所にて外に

他[illegible]折[illegible]撥も家嚴が利休ともに入来り手詰の談判[illegible]貢[illegible]這

方[illegible]見遣しけるに許出で清閑[illegible]糾[illegible]云葛

[illegible]平[illegible]家[illegible]狸[illegible]

[illegible]狸[illegible]

阿弥と共に帰りしとう。事あげ事はあらぬ。其身は闇さて手出しもなく。宗厳が奢りを尽くしたる。母子商量なるに無地内く早宗厳が見脚は法師に所詮這度の謀計は未遂難きて辺鄙々々と身を隠れつゝ侯つて益々業なれば迎ふる事て此家の黄金を程掠取て他郷て落つるに増る事はなし。猶世中を治めんと諸人の割據の大名とて名もなき我落ちうとて影隠れ此勇ましき日影に照る事なく再奇の言葉て従ひつゝ内内て知らるる事て三人均しく黄金を奪ふて四五百金を得て安堵へて備後口を寄せ手を家を抜出る事は運て有繋なる人の習ひて極めて精妙なる這時まで天も明々ねば若き奴婢等も眠然れば知らるる者もなく紹



頭此日鴨屋へ阿繁は罪を出て又其罪を評被し狭蓬母子を家を立出でる出でる事て殊なる鬼に攻められて同じく家を立出でる事と云ふ閑話休題却説狭蓬母子と其因厚き反對なる奇しき事なり鴨屋を出て後は行先を商量なる丹波国芦生の山里に猶とて世を送る筒平と云ふ僅の親戚なれども年来疎遠に過ぎたれども行て頼まば手引なれば此処に得て何なると盗て黄金を資本として又江湖上に立出でんと大方て先づ決めて急がば秋の日なれば今日は中に鞍馬山まで越得つゝと打語て耳を側て直走なるに思ひもよらぬ早く来て其日は日暮下刻に既に麓に着きなれば山に打登り思ひ門天に伏拝して尚行先は運を祈りて程なく就き故なる方て行くなどと名を聞えなる山なれば分行くなどに路嶮峻

こけむしたる石の上を足を下ろす最危し瞻上げて剣峰を仰ぐ
苔滑
男蕗を踏み足を下ろす最危し瞻上げて剣峰を仰ぐ
如く一せて幽溪響て穿てるよ似たり鳴禽声遠うして老杉影
暗く殘花秋深て髪に霜結ぶ目を見る絶景なるに風流
なる狹蓬て早大く足を傷めて今て一歩も運ぶこと能はず
掛るよ無地内も詫方なく足を駐めて勤めて思ひ
向ふて母子相語て作る事て霎時も怠ること能はず
藥鑵の中なる蜻自物手を一足さし出し止むてなるべき工夫て易し假令
鵲屋外結ぶ共も黄金しなれば心子と思直しつゝ此處なる
迫来りしとも篤と後を惟るて
信もせぬ嘘一言も嘱れて承諾なるも思はれて是れ將言
て目的何ぞ無なるに虚しく雪を見る



第七套

蔭頼まれぬ法の花

却説悪賊無地内を望む如く狹蓬を我手つゝ縊殺し息の絶たる見澄し
て獨笑ひ打笑ふ是よ邪魔を拂ひ最早這身の勝手なる偖
何地なる奔んと再つゝ思案なるに元なる
なるとて外に是と以て頼ん家もなく
夫なる筒平許音信て受諾れなれば
決定る母狹蓬が息吹返して影護ると意注き傍て有合る手頃なる岩の欽行
て擡上げ狹蓬が頭て目掛け力て投着まで何ぞ能く堪ふつき脳骨砕
け目球飛出目も当てられなる盖し昔日来の罪の報ふ所無地内て殿て谷側
我手の手よりて敢て消行なる怖るし
行て早く日も暮れ
秋の景の名残なる途

こけむしたる苔滑　黒藻もとゝ足で下ゝ最危し　瞻上望ぜば剣峰　剣で植えゝ如く一せに幽溪撃て穿てるよ似たり　鳴禽声達ゝて老杉影暗く殘花秋降て髪に霜結ぶ　目を見る絶景なるに　風流なる移ゝ心動かされ　蒭蕘も足で拉ぶ石蓮を踏まれ程なく狹蓬て早太く足を傷めて今て一歩も運びがたしと傍の嵓に腰打掛けるよ無地内も註方なく足を駐めて暫時思ひ向ふて母子相語て作りし事て霎時も忘れ難し　耶宗嚴尊者の破れ藥鑵の中なる蛸自物手を一足さし出し　こゝの止むことなる丈夫で易へ假令鵄屋が結ぶ黄金しるべも心なく思直しつゝ此寓すて遁来りしども篤ゝ後を顧るに　芹生の山里なる山幸の筒平とて年來音信もせぬ母に唯一言も嘱托して承諾なくして思ひ立て是れ將に書て目的何ぞ益なきこゝ思ひ是れ母なるに此婆て閑



第七套　果因の地獄

却説悪賊無地内て望ゝ如く狹蓬て我手つゝ縊殺し息の絶たる見澄して獨笑角とて打笑ふ是ゝて邪魔て拂ひ最早這身ゝ勝手なる儘何地ゝ奔んと　芹生の山里ゝ行ゝ思決めゝ思案なるふ元ゝ思回ゝつゝ　芹生の山幸ゝ行ゝ思決め

汗も[illegible]て辛く初更の比て無事に出て[illegible]稍胸を安めつゝ不知案内なる[illegible]重なる而も月なきこの[illegible]途を探るて極めて便なく[illegible]て早晩山奥に入るもなて彷徨入り行くも行くも人家もなく暗き歩徹せもなく身も甚く疲労て覚へ其辺の岩に腰打掛け暫時題れて[illegible]程て心ともなく星夫て對向て見れば這て甚敵死せりと思ひ狭蓬の[illegible]ゆ[illegible]立ける如き流石不敵の無地内とて素より当時の人民なる幽冥無根の[illegible]説なれ共真と心得ける今這山路を踏入れば母を殺せしところもあれ同じく[illegible]る山路なるまゝと思出なる非さるを怪と見るに尚更て驚とするまで駭すに弱風を示なるに叶はるまゝと膽を決めて突と近つき物を言て抜撃て発矢と打込んとせしもなく腕を賛の有るなれば刀を抜らよ何とな[illegible]心臓せず抜掛けるも刀尖鞘に差支て思ひの侭に滑焉と抜ん[illegible]這て口惜しと力を窮め身を可笑て捻りつゝ也とそ[illegible]引抜ん辛く鞘を離れて



命落を避んとて手元狂ひ我と我腮三四寸刀尖上て破と斫る腕鈍なれども刃を[illegible]て又向う突所まのなれば寒刻も得堪ぬ[illegible]と斗て倒れる拍子に側の石地蔵に触るよりて件の石地蔵も基礎頽れ[illegible]る無地内居るしとなく腹の上に重なる原[illegible]て重差と倒れる下[illegible]誰やらんと何の頃なる此山路に建てるもの曩に眼の迷なる無地内が母の狭蓬と見めるる物なるべ今之をも母なるもの之霊ぞと看詞して撃れ[illegible]せしに動て[illegible]傷て負ひたるなれば剰推と看なれば天の冥譴奇なるこの形怪もり程て無地内に今此地蔵が我腹の上に倒れ蔓りもなくて重量に痛む[illegible]地難く身動とてもなくなる[illegible]這て狭蓬が我を怒る山路に[illegible]しめ斯る憂目に見あるるに増さる増さる無何れて反動さんと関めるに驚倒るもの[illegible]中に石反返さんとさるなれば跳く度々重量も加へて骨も摧るるなれども[illegible]之て地蔵と映ぶに唯狭蓬と思ひ[illegible]辛くして手を働し向に抜きれ

る力を以て救ひて在りしを威多無性にて我腰を押さるるを物斬り捨てんとせしに
石ころの如くに些も感ぜざる果を刃も鋒降ろす発矢と折れて飛散りて無
地内殆呆者今は精根尽きて涙ぐみて声悲しく母御前に報ぜ
て如何に児問て罪深かりしかも一日の悪念まで念まで筒平とても頼まるるに母御前
もすがら偖りの如ど心吁仰ぬけと思凝なる所にて別段の事候さに思ひ母
御に我母なるに謂上るすまの器量なる人暴て阿繁に陥さて其事破れ
又術を更へ風を喰つて逃来りし其謀圖の奇妙なる皇朝の楠公唐土なる子
房孔明なりとても及ぶべきなるに搗て加てロまて籠て死なる後まで此勇力の
ぬるく見て大力と思ひ今母御前に斯く推看られて尚まして巴
板額迚中の陶兼冥持提なるに月なる漏る貧居とて母御と二人暮なんなる
鉈なるに我手なるべきの非業の御最期今なる重々箱の饅頭なるもに
西て他年なる我未櫃に肥て跡なるに更て水瓶の形なる釣鐘に有れ



無地内

る寺の上人て此黄金なる寄進なて就て追善なるに折数命に思切る
厚丁なるに良なるなるに金れなるに快疾成仏なるなるなと心地なる
なるなるて折まて憎なげて口説なるなるに我体に押なるなるに此なるに
備に所入れなるなるに悲やと口なるなるなるなる詩々打詫なる当下不思議や
腹の上に押なるなるに糸なるに細なるに伝なる津味なる声音なるなるなる答なるなる
不孝の無地内今更て骨身て深に自なるに我身なるに世なるなるに好なると計
りなるなるに奈なるに思なるに世なるに助て辛に報なるなる天地容なるなる罪人なると有
繋て人の親なるなるなる我子に思なる闇て迷なるに凡ての世なる定理憎なると思に世
も我子此後母に殺なるなる罪露なるなる搦められ敢なるなる死なるも不便なるこなると思
なるものなる此処まで引入れ切なるなる常に示なるなる誠に失非に後悔なるに追善追福
せんとなるなるに怨に許なるに得なるなるなるな

近頃なりし者なれども其法力の廣大なる其孝問の無量なる能く七賢の真
味を觀ぜり十惡の衆生幾度か叱られと尋常の尼の如く煖衣飽食の事
なれば唯安心決定なり黄金魔中身一人靜に學び老を送り他を求むる事も
なく淺等の今日假有難き清淨の比丘尼なれば人孝を追福せんとて此尼を
屈勞なく吊らえ也人も世にもなる
べからしなり曉得なりとなるに無地内怡悅なる堪ぬ爭でか皆まるる
べきせて母なるべき誰り斯く怨を忘れて子の爲と思ふなれば仰
の如く住人願ふて重量を退けてなく要時なりとも得もなるべきと苦樣
て答ふれば腹の上なる重きもなれども重きを諾なれば
然りとて今吾が力なるを此重量を退るなるべき何故と云ふ時は
此が母を殺すを是天道に背くなる母の親子の情をもて怨を捨て底
なれば天道の之を許なるべきなれども母の情を因僅に四討を輕なるも



るべきなれば大儀なるを尋ねて曰く斯言の何となく阿諛に似たれども各門の常
日頃心性忠實なれば聊偽る事なるべきなれば故意来て煩へる人命を救取
る功德に實なるべと何なれば評判なる尼が作嘱
辭なれば此処に来て見れば果して地藏に押されて倒れ
ぬ此なるべき妙達尼が前言と吻合なるを極めて奇なり能く知るべき尼
が處に至るべき緣由を分明に所云なる人幸給て前に立ち導誘なるを
無地内に僧侶と思当りて怪気なるべき喜びを述べつ這們に連れて黄金
魔に至りて先其体裁を打視るに霧なる斷の香に焼き月常住の燈に挑
げなるを思ふ斗なる牆を破れ門を傾き苦薩なる屋根
朽なる拄黄金魔と名付なるを皆動也々と入来れば尼を快く出迎へ
各們洞に大儀なるを耶旅人に此人よりよ無地内大人疲備のため所織とも上
に上なる趙ぐれなるを早既に名を潰えつ呼ぶべきなる或々目を目を見

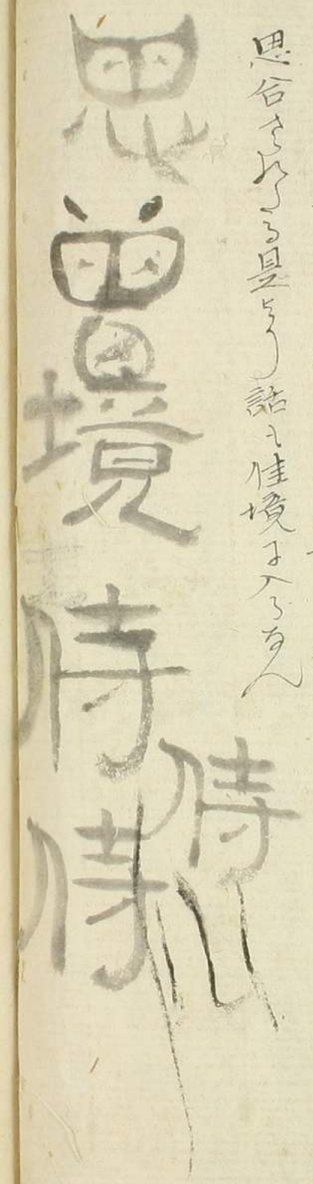
合点まで旦感ぶ旦驚き現て此尼を凡人なりしと思ふとうの暇を告げて帰りて踊る尼妙達てやがて無地内で勤て生て つを
葬て薦め喃無地内大人今年が始んとの一面の識だて無きて 親き救
望みを世の事を降き故にる事すて里人們まで教て告げなど誠を始んと
が乞母 て頼まれる事にれて さて 救はれる心当の在さぬや
とにて無地内陳とそう身の毛立つまで驚きつ返答て差迫り古なる晋
を仇なて振りきて うつむきて にるを妙達さこそと微笑て現る始んと
が口づから言ふを頗る正き事なりを故由打明まん心を鎖めて聞かん
切て年今日の暁 ことふ側を見れば一人の老せ行きなる年の行きる内こそ
なきる事まも駆まれれ今々此身を佛門て年なりを道心を試む佛の業
なるんと思で此を嘆く侍なく 世を誰をも眼附れば老せを見難なり
涙を袖て掻拂ひ尼御前驚きの なられ年を寿陽人なりにさとて



御て仇なる物なる侍ぶれども頼を申さん訳にて推て等はなる人を救
ふを出家の本願事で聞入れ なりとて 年を猶此勝押進め辞由を問ふ
て老せを答てい 無礼を厭ぬを 直てゆるしなる事最喜び
侍れ事を年を人の悔なる仏を無地内と呼做なる此障る事にて年をもも
強立なて薄情を一途て年をを疑ひなる 遂を竟て殺害を此処
の山まで逃れ とを手を思ふことを親の常竟を掴められんと思で密て不
便なれば路て立れをなる地蔵尊もて押看憂目を見せて罪咎を免れを
なく計りて就て謝得なるして失非を後悔せ てを踊て呼をんとなる
なを尼御前て頼めるしと呼附て れば 助もまる 事で心を密なるにて渠を救
て得なを 頼まるを せんを此事なるを なれ聞入の てを と切なる望て年を
まるとを不便て思ひ なで諾ひなる 答られで老せを礼を許多問述て消
失なるまを見なを南柯の一夢なを 驚てを心安なで夜明を と均く里人を

語られて後[illegible]老せがれの言の如くに山に行き尋ぬるに果して果報哉
卿の其處に在ちよりて断く救ふ事を得て保嘱して宝くるべしと喜
べき事なりと一伍一什を説明に辯舌尼なれども涸々として陽るに
とまれ最尊様に聞あるまれば無地内殆感ぜ果て洞に仰ぎ毫違なれば今更
なれども恥じまして此身分に孝乱暴なるまして後悔の外候ひ尼其後悔を現ずるも且
て母が追善に腰纏に持ち五百金の内四百金を尼に捧げ読経の
事を願ふべく這た小向が只一個の志まを候へば既に知らせるべく母ち
教示も候へば任ぜて許されるべしと云ひ腰を撫撫り黄金を取出る四百
金耳を揃て差出せば妙達も絶て辞まれ洞を見て地に伏て母御も御心行
なるべきなれば助貴意に従ひて読経其外追善を委よろしく料ふ
べきなれば御心安く在せらしと云ひて立て佛檀の側なる手匣の内に四百
金を取斂め又無地内に打向はされば地に在て疲倦も在さん且追善の侍



なるべく斧主にはなれば便無なれば今日の地に此処に洞に扨翌日妻が読経の
時まを立臨ませるべしと最也実に聞えるる無地内之を打聴て絶て辞まれ
有難ふと礼を述べて其意に賛れ宿借る事に定めるる畢竟此尼善悪ち
無地内其後甚野[illegible]者客の疑しまず金に解匹[illegible]と変ふ
に変を始く割て後に次老の餞興とは看客之を察ぶの如く宰下某生再説
不顕阿弥に鵜屋を去しとう利仲が家まを去るもちろん親属の保切仲子の家よ
引れて月日を経るほどに快くも天正十八年春三月となるるに此年を諸
国も静なれば都の人氣も[illegible]大に浮立ち此処の山邪処の野辺と思ひて出
遊ぶに何處も弾に賑ふより人々毎に評判なるに利仲も之を傳聞一日
世良は分付て阿弥が宅に到るまれば阿弥に喜び立迎て上座に請ぜ
四方山の物語をなれば世良やがて云る事に聞と及ぶせるにや此頃天氣の明
麗なる国々の静なる都も人氣浮立て黒谷傍に櫻に花に弾に人の賑ふよ

忘無筆てれ〻ねるまゝ病と蔓出るまゝ野辺送もまゝ世に住て見る事
て大人と冒ふ心向きなまゝやと云ふ事阿繁と這日頃久〻出行せざりし
ゆゑ心裏珍らしく思ひとり奈良と応ずる事世身も歓びて さらば何日まで
ゆくらん心找さし時て住き故一度も此間申上ても大人の御心安ふしめんさら
ばとそろ〻出行ふを阿繁を送りて利休まで逢ひて程なく答へ帰り備習昔
とあるゆゑ天を一とご農ゆゑ今日こそ行ゆめと思ふ立て阿繁を由を父
母に告げ阿寸我ゆゑめ名三名の侍せを連れ輻物まで巳と二人の子供を
乗せ黒谷指ゆく出行ゆゆ是此家の禍を招き一寺と後遂に中ゆゆ
思合さふる是ゆ話と住境よ入ゆ